

平成23年度事後評価等 研究評価結果報告書

平成23年度事後評価

山形県試験研究機関試験研究課題

山形県試験研究機関業務課題

山形県分野融合・萌芽研究推進事業課題

平成24年度事前評価

山形県試験研究機関試験研究課題

山形県試験研究機関業務課題

山形県若手チャレンジ研究推進事業課題

平成24年8月

山形県研究評価委員会

今回報告のあらまし

本報告書は、平成23年度完了した試験研究課題、業務課題、分野融合・萌芽研究推進事業課題についての事後評価結果及び平成24年度新たに研究等に取り組む課題で、これまで評価されていないものについての事前評価結果を取りまとめたものである。

事後評価については、基本的には書面評価で行ったが一部の課題では書面評価に加えプレゼンテーションとそれに対する質疑により評価を行った。また、研究内容が優れていると認められる5課題を優秀研究課題に選定した。

事前評価については、書面評価により行った。事前評価課題は、平成24年度県試験研究機関実施予定の試験研究課題、業務課題及び若手チャレンジ研究推進事業課題で、平成24年2月実施の研究評価以降に計画され、競争的資金などに応募等行われたものを対象とした。

1 平成23年度県試験研究機関試験研究課題、業務課題及び分野融合・萌芽研究推進事業課題の事後評価

1-1 評価対象及び評価方法

県試験研究機関が実施した試験研究課題及び業務課題41課題、県分野融合・萌芽研究推進事業6課題の合計47課題について事後評価を実施した。

(1) 県試験研究機関試験研究課題

平成23年度に実施した36課題について、提出された研究課題結果報告書により書面評価した。実施段階A区分は16課題、B,C区分は8課題、競争的資金を活用した公募型研究課題は複数年実施が11課題、単年度実施が1課題である。

研究費30万円以上の実施段階A区分であった11課題については、書面評価に加えプレゼンテーションとそれに対する質疑により評価を行った。

(2) 県試験研究機関業務課題

平成23年度に実施した研究的要素が高い5課題について、提出された業務課題結果報告書により書面評価した。

(3) 県分野融合・萌芽研究推進事業課題

平成23年度に実施された6課題については、事業実施結果報告書により書面評価した。

研究機関毎の評価課題数(平成23年度)							
研究機関名	試験研究課題				業務課題	分野融合・萌芽研究課題	計
	一般課題		公募型課題				
	実施段階A	実施段階B, C	複数年実施	単年実施			
環境科学研究センター							
衛生研究所		1			2	1	4
工業技術センター	4 (1)	1	3			1	9
置賜試験場							
庄内試験場	1		1				2
農業総合研究センター	1	1	1	1			4
園芸試験場	5 (1)		3				8
水田農業試験場							
畜産試験場							
養豚試験場		2					2
水産試験場	1	1				1	3
内水面水産試験場		1					1
森林研究研修センター	2 (2)	1	1		3	2	9
村山産地研究室	1 (1)						1
最上産地研究室	1		1				2
置賜産地研究室							
庄内産地研究室			1			1	2
合計	16 (5)	8	11	1	5	6	47
※段階区分Aのカッコ内の数は予算30万円未満の課題(内数)							
一般課題 ^{*1} (実施段階A+実施段階B, C) : 24課題		*1:県独自の事業として取り組んでいる課題です。					
公募型課題 ^{*2} (複数年実施+単年実施) : 12課題		*2:公募により外部資金を調達して取り組んでいる課題です。					
業務課題 ^{*3} : 5課題		*3:外部からの依頼を受けて取り組んでいる課題です。					
分野融合・萌芽研究推進事業課題 ^{*4} : 6課題		*4:若手研究者を対象とした県独自の課題です。					

ただし、実施段階区分は次のとおり

A区分:研究開発を実施していく段階にある研究

B区分:フィジビリティスタディ、マーケティング調査等を実施すべき段階にある研究

C区分:事前調査等研究会レベルから実施すべき段階にある研究

1-2 評価の視点

評価の視点については次表のとおりとした。

(1) 県試験研究機関試験研究課題、県分野融合・萌芽研究推進事業課題

評価項目	評価の視点
目標の達成度	○成果指標に対する達成度はどうか ○目標設定は振り返って適切であったか
計画・手法の妥当性	○目標達成に向けた適正な進行管理がなされたか
新規性・独創性	○新規性、独創性のある研究または成果が得られたか ○成果の公表(成果発表、学会発表、論文、特許出願等及びその準備状況)がなされたか
成果の発展性	○研究成果に展開可能性があるか

(2) 県試験研究機関業務課題

評価項目	評価の視点
業務の達成度	○目標どおり達成されているか
業務の推進手法	○効率的な体制で取り組んでいたか
業務の合目的性	○目標に合致した業務内容であったか
業務の発展性	○今後、実績が生かされていく可能性はあるか

1-3 評価結果の概要

概要については次表のとおりである。また、個別課題毎の評価と評価委員会による助言・指導意見については報告書巻末の資料(表1~4、頁9~11)のとおりである。

(1) 評価結果(県試験研究課題、県分野融合・萌芽研究推進事業課題)

評価結果	県試験研究課題	分野融合・萌芽研究推進事業課題	
目標を大きく上回る成果を得ており、今後、成果の活用や研究の発展が大いに期待できる課題	A	1	0
目標を上回る成果を得ており、今後、成果の活用や研究の発展が期待できる課題	B	6	0
おおむね目標とした成果を得ており、今後の展開が求められる課題	C	28	5
目標とした成果を得ることができず、今後の展開については大幅な見直し求められる課題	D	1	1
計		36	6

(2) 評価結果(県試験研究機関業務課題)

評価結果		県試験研究 業務課題
目標設定を大幅に上回る成果と認められた課題	A	0
目標設定以上の成果と認められた課題	B	0
目標どおりの妥当な成果と認められた課題	C	5
目標を下回る成果と認められた課題	D	0
計		5

1-4 平成23年度優秀研究課題

1-4-1 選定方法

平成23年度に実施した試験研究課題、分野融合・萌芽研究推進事業課題42課題のうち、目標を大きく上回る成果を得た課題と今後の発展性に期待する課題として優れた5課題を選定した。

1-4-2 選定結果

優秀研究に選定した課題は次表の5課題である。

No	課題名	所属・職・氏名	研究の概要
1	カーボンナノチューブを用いた発泡成形体の開発	工業技術センター 主任専門研究員 佐竹康史	発泡スチロールにカーボンナノチューブ(CNT)を添加して成形体を得る方法を開発した。軽量で、断熱性と緩衝性に優れた材料である樹脂発泡成形体内部に、CNTの3次元網目構造を形成させ、導電性を付加する事に伴い、新たな機能性を付与できることがわかった。
2	県産スギ材を活用した外構部材の開発	工業技術センター 専門研究員 江部憲一	山形県産スギ材を活用したサッシを開発した。建築基準法に規定される『防火設備:遮炎性能20分』の性能を実現した。枠材にスギを用い、さらに網入り補強されていない複層透明ガラスでの防火設備性能の実現は、日本初の成果である。

3	ステンレス鋳鋼品の信頼性向上に係る技術の開発	工業技術センター 主任専門研究員 藤野知樹 他7名	ステンレス鋳鋼の耐食性を改善し、また、部材実体の機械的特性や金属組織を非破壊で評価する技術を確立し工業材料としての信頼性を向上させることによって、自動車部品等における需要拡大を実現する。
4	県産紅花を利用したニット原糸の開発	工業技術センター 専門研究員 平田充弘 他2名	羊毛糸の濃色紅花染めを達成するため、市販カチオン化剤を用い各種条件(加工剤の濃度、加工液のpH)にて改質加工、特性評価(強伸度、測色試験)を行った。得られた最適条件を元に色見本帳の作成、ニット製品の試作を行った。
5	低炭素時代にむけた自然エネルギー利用率を最大限に高める施設栽培用ヒートポンプシステムの開発	庄内総合支庁産地研究室 主任専門研究員 菅原 敬 他1名	安定した運転効率係数が得られ、地中熱の他に幅広い熱源への対応が期待できる施設園芸用のクローズド型の水熱源ヒートポンプシステムを開発した。オリエンタルハイブリッドユリ栽培において、冷暖房の能力を比較・評価したところ、暖房コストや炭酸ガス排出量を削減でき、品質および収量の向上につながる事が明らかとなった。

2 平成24年度県試験研究機関試験研究課題、業務課題および県若手チャレンジ研究推進事業課題の事前評価

2-1 評価対象及び評価方法

- (1)試験研究課題について、平成24年2月以降の計画で事前評価を受けていない一般研究課題1課題、公募型研究課題12課題を书面評価した。
- (2)業務課題についても、平成24年2月以降の計画で事前評価を受けていない1課題を书面評価した。
- (3)県若手チャレンジ研究推進事業は、平成23年度まで県分野融合・萌芽研究推進事業として県試験研究機関を対象に単年での募集、実施してきたものを、平成24年度から改編して募集を行い、事業実施することになったものである。この事業には8課題の応募があった。これらの機関別内訳を次表に示す。

研究機関毎の評価課題数(平成24年度)					
研究機関名	試験研究課題		業務課題	若手チャレンジ	計
	一般課題	公募型課題			
環境科学研究センター				1	1
衛生研究所			1	1	2
工業技術センター		2		2	4
置賜試験場		1			1
農業総合研究センター		3		1	4
園芸試験場	1	3		1	5
森林研究研修センター		2		1	3
庄内産地研究室		1		1	2
合計	1	12	1	8	22

2-2 評価の視点

評価の視点については次表のとおり。

(1) 県試験研究機関一般試験研究課題、若手チャレンジ研究推進事業課題

評価項目	評価の視点
目的の明確性	地域ニーズ、社会的要請や行政施策を踏まえ、試験研究の目的や目標を明確にするとともに成果を測る指標等を設定し、定量的に進捗管理できるようになっているか。

研究進度に応じた熟度	当該研究目標が目指すべき最終目標に対して、適切な段階の設定となっているか。当該研究の研究段階に応じた知見、技術的課題、公募型研究プロジェクトなど連携・協働への展開可能性などが明確になっているか。
成果波及の可能性	研究成果の活用及び実現可能性の検討・検証がなされ実用化への道筋が明確になっているか。
研究手法の妥当性	アドバイザー・ボード等からの助言指導を受けての対応や、その他研究手法が効率的なものとして組み立てられているか。

(2) 県試験研究機関業務課題

評価項目	評価の視点
業務の合目的性	試験研究機関全体としてのミッション(期待される具体的な使命)の中で、当該業務の位置づけや必要性が明らかにされているか。
業務の発展性及び戦略性	当該業務が担う役割や個々の試験研究との関連について検討されているか。これらの情報について有用性や発展性について検討されているか。 相談や検査・調査、普及、指導等の業務を新たな研究開発への展開や地域経済、県民生活に還元しようとしているか。 他機関との連携・協働等について検討されているか。
業務実施体制の適切性	当該業務の内容が、試験研究機関の担っている役割分担や能力に見合っているか、効率的な運営、適切な実施方法が検討されているか。

2-3 評価結果

概要については次表のとおり。個別課題毎の評価結果と評価委員会による助言・指導意見については、資料(表 5~8、頁11~12)のとおりである。

なお、公募型課題については6課題が既に採択され、県若手チャレンジ研究推進事業においては、評価結果を踏まえて5課題が採択された。

(1) 県試験研究機関一般試験研究課題

評価結果		課題数
研究計画が適切で、研究の展開が大いに期待される課題	A	0
研究計画は概ね適切であり、研究の展開が期待される課題	B	0
研究計画は概ね適切であり、内容を精査することにより、研究の展開が期待される課題	C	1
研究計画の大幅な見直しが求められる課題	D	0
計		1

(2) 県試験研究機関公募型試験研究課題

評価結果		課題数
計画が適切であり、提案を妥当とする課題	可	12
研究の内容や目標の設定など計画の見直しが求められる課題	不可	0
計		12

(3) 県試験研究機関業務課題

評 価 結 果		課題数
業務計画が適切であり、実施すべき課題	可	1
業務の内容や目標の設定など業務計画を見直したうえで実施すべき課題	不可	0
計		1

(4) 県若手チャレンジ研究推進事業課題

評 価 結 果		課題数
研究計画が適切で、研究の展開が大いに期待される課題	A	2
研究計画は概ね適切であり、研究の展開が期待される課題	B	2
研究計画は概ね適切であり、内容を精査することにより、研究の展開が期待される課題	C	4
研究計画の大幅な見直しが求められる課題	D	0
計		8

表1 平成23年度 県試験研究機関試験研究課題(一般研究課題) 事後評価

整理番号	研究課題名	試験研究機関	外部評価結果	評価委員会指導・助言
1	食用菊等県産食材の機能性研究 ー抗ピロリ菌作用・アルコール摂取に対する作用などー	衛生研究所	C	抗ピロリ菌活性及びアルコール摂取に対する作用等、高付加価値化へ繋がるシーズを見出している。今後は、どの程度摂取すれば効果があるのか明らかにしてほしい。
2	MEMS型流体制御素子を用いた生化学分析システムの開発	工業技術センター	C	MEMS技術による流体制御素子の開発を行い、分析システムを構成できている。各素子の完成度を高め、既存システム以上の性能を発揮できるよう研究を継続してほしい。
3	カーボンナノチューブを用いた発泡成形体の開発	工業技術センター	A	低予算での基礎的な特性試験を経て、研究成果の技術移転による実用化に向けた努力は評価できる。新規の機能性材料として実用化を目指してほしい。
4	市場ニーズに応える発泡清酒の多様化研究	工業技術センター	C	味の違いを消費者が識別しているのか、ターゲットを明確にしたマーケティング調査きちんと行い、山形県の日本酒の人気を押し上げることを期待する。
5	県産紅花を利用したニット原糸の開発	工業技術センター	B	これまで困難とされていた天然素材への紅花染色の手法を確立したことは大きな成果といえる。県内企業への普及に期待したい。
6	県産葡萄を用いた微生物によるワイン醸造技術の開発	工業技術センター	C	貴腐ワインを県内で製造できるようになったことは評価できる。山形ならではの特徴を持つワインの商品化に繋がることを期待する。
7	庄内特産果実(日本梨)の高度加工技術開発	工業技術センター 庄内試験場	B	規格外の梨を有効利用する上で、機能性成分と熟成度の相関を計測している点は高く評価できる。今後、機能性成分を含んだ加工品としてだけでなく、食品材料への利用・展開や他の果物における同様な研究の展開を期待する。
8	水稲害虫フタオビコヤガの効率的防除体系の確立	農業総合研究センター	C	害虫防除の効果的な薬剤と散布条件を提示しており、有用な調査となっている。今後の実用展開に期待する。
9	県産米利用促進のため米粉生産・加工技術の開発	農業総合研究センター	C	小規模加工施設でも対応可能な多収米を利用した米粉による食品の加工方法や品質管理について提言できており評価する。
10	積雪寒冷地型ヒートポンプシステムと効率的利用技術の開発	農業総合研究センター 園芸試験場	C	ヒートポンプシステムの県内の施設園芸における経済効果を検証した点は評価できるが、まだまだ、応用範囲が限定的である。導入コストも含めた経済的観点からの評価も必要と考える。
11	ばら養液栽培における日射及び水分センサを用いた自動給液制御技術の確立	農業総合研究センター 園芸試験場	C	自動栽培で収量や品質の低下を招いた原因を明らかにしながら進めてほしい。
12	オリジナル四季成りいちごの産地化技術の開発	農業総合研究センター 園芸試験場	C	栽培面積が拡大していないことについて、技術普及面の課題を分析する必要がある。四季成りいちご(サマーティアラ)がブランド化され山形のイチゴの代名詞になるよう、他品種との差別化を明確にして積極的な市場開拓を進めることを期待する。
13	りんご早生有望品種‘ファーストレディ’の早期成園化と安定生産技術の確立	農業総合研究センター 園芸試験場	C	ファーストレディの早期成園化について一定の成果をあげている。産地拡大する上では品質の問題が生じ、マニュアルの有効性など継続的な管理が必要である。
14	食用ぎくの品種開発	農業総合研究センター 園芸試験場	C	収穫時期を遅らせた品種を開発できたことは評価に値する。今後は、この品種の特性の解明や安定生産に取り組んでほしい。
15	豚に対する飼料用米給与技術の確立	農業総合研究センター 養豚試験場	C	養豚における飼料米の配合率を豚の生育状況に合わせて確定できた。安くておいしい豚肉の生産に繋がるよう普及に努めてほしい。
16	未利用資源炭化物の大腸菌産生毒素吸着能の検討	農業総合研究センター 養豚試験場	C	毒素吸着機能の高い炭化物の生成には成功しているため、豚生体での効果について特許取得とともに継続的な研究に期待する。
17	ソフトシェルクラブ生産実用化(真菌症対策)のための技術開発	水産試験場	C	ソフトシェルクラブの真菌症感染対策について一定の成果を得ている。安定生産につなげるよう、関連する菌類にも注意しつつ、継続的な研究を望む。
18	ナマコの資源診断とその対策の研究	水産試験場	C	ナマコの生態調査について成果が得られたので、今後は資源の安定的な確保について検討を行ってほしい。
19	最上川水系におけるアユ資源量調査技術の開発	内水面水産試験場	C	アユの遡上数を推定する方法が確立できたので、県内各河川での実施に期待する。

20	原木栽培に適するキノコ系統の作出	森林研究研修センター	C	原木栽培に適したなめこ有望系統の作出に成功したので、今後は、生産性や商品価値について研究を継続する必要がある。
21	県産スギ材の乾燥特性を踏まえた建築用材及びバイオマスとして利用技術の開発	森林研究研修センター	D	県産スギの乾燥方法について提案しているが、目標も成果も数値が示されておらず、どの程度低コスト化ができ、ロスはその程度に止めたのか、またどの程度熱効率が向上したのか判断し難い。(成果を理解する上で必要な基本的な手法を明示する必要がある)
22	次世代スギ品種の開発と実用化に関する研究	森林研究研修センター	C	生育の早い優良なクローン無花粉スギの選定ができていますので、無花粉スギ出現割合を向上できるよう継続的に研究を進め、成果の実用化を目指してほしい。
23	おうとう安定生産技術の開発	村山総合支庁産地研究室	C	佐藤錦の安定生産のための受粉樹品種を特定することができたが、導入効果については今後の経過観察が必要である。一方、紅秀峰の結実制限については効果的な方法の模索が必要であろう。
24	新たな産地育成のためのベリー類の品種特性の解明	最上総合支庁産地研究室	C	食味、生産性等が満足できる積雪地域で栽培できるベリーを選定できている。市場性も期待できるヒンボートップに絞った生産拡大に努めてほしい。

表2 平成23年度 県試験研究機関試験研究課題(公募型課題) 事後評価

整理番号	研究課題名	試験研究機関	外部評価結果	評価委員会指導・助言
1	ステンレス鋼品の信頼性向上に係る技術の開発	工業技術センター	B	ステンレス鋼部品の耐食性の達成と現場での簡易的な品質管理の手法を確立したことは高く評価する。今後の展開に期待する。
2	プラスチックペレット品質管理システムの高度化開発	工業技術センター	C	どのような性能の検査装置が開発できたか報告書からは窺えないが、システム開発は完了しているので商品化に向け改善を継続してほしい。
3	県産スギ材を活用した外構部材の開発	工業技術センター	B	県産スギの活用に繋がる製品化ができており、そのぬくもりとしての印象とともに高く評価できる。今後の市場での展開に期待する。
4	機能性を活かした食品加工技術開発と商品開発	工業技術センター 庄内試験場	B	生食の消費で余った材料を加工食品として、製品化まで繋がる開発ができたことは高く評価できる。今後は企業との連携や販売戦略を考えながら進めてほしい。
5	フェロモントラップを基幹としたアカヒゲホソドリカスミカメ高度発生予察技術の開発	農業総合研究センター	C	斑点米被害予測は、限られた範囲でしか適応できていない。実用化に向けた継続事業の更なる研究成果に期待する。
6	水田における難防除雑草の発生実態に即する対策の検討	農業総合研究センター	C	抵抗性雑草の県内での発生地域を確認し、代替薬剤を特定できているが、更なる調査結果に期待する。
7	地域遺伝資源「食用ギク」における系統識別技術と優良系統の開発	農業総合研究センター 園芸試験場	C	形質評価については目標値を超えるデータベースを登録でき、一定の成果を得たといえる。
8	アスパラガス周年供給に向けた促成用根株養成技術の確立	農業総合研究センター 園芸試験場	C	育成法については、慣行法より有効な方法が得られなかったのだが、栽培管理・除草体系についてはいくつかの成果が認められる。品質やコスト面を考慮する必要があるのではないかと。
9	農産物の機能性を高める栽培技術の開発と品種育成	農業総合研究センター 園芸試験場	C	機能性成分の増加法について3種類の産物について提示できており評価する。生産方法の普及に期待する。
10	広葉樹林化のための更新予測および誘導技術の開発	森林研究研修センター	C	荒廃針葉樹林を広葉樹林へ転換する技術など、それらの成果を明確にしたうえで、成果の応用や検証などの継続調査を行ってほしい。
11	国産ラズベリーの市場創出および定着のための生産・流通技術の開発	最上総合支庁産地研究室	C	積雪地域に適したラズベリーの栽培技術が確立でき、今後技術普及を行うことで生産拡大による産地形成に期待する。
12	低炭素時代にむけた自然エネルギー利用率を最大限に高める施設栽培用ヒートポンプシステムの開発	庄内総合支庁産地研究室	B	地下熱交換方式ヒートポンプ空調の環境負荷低減の有用性について示され高く評価する。今後は経営規模や初期投資も考慮して普及に努めてほしい。

表3 平成23年度 県試験研究機関業務課題 事後評価

整理番号	研究課題名	試験研究機関	外部評価結果	評価委員会指導・助言
1	エンテロウイルス71型の遺伝子型解析	衛生研究所	C	エンテロウイルスの遺伝的解析と伝播ルートの推定を裏付けるデータが得られている。感染症対策のためにも、継続的な調査に期待する。
2	小児感染症研究	衛生研究所	C	中和抗体の特異性などから正確な結果が得られておらず、問題点を解決して継続する必要がある。
3	白色系ナメコの栽培に適する系統の調査	森林研究研修センター	C	実地栽培によって選抜した優良な品種の登録を経て他の産地との差別化が図られ、生産額向上に繋がることを期待する。
4	間伐材利用拡大システム調査	森林研究研修センター	C	調査業務として今後の調査に繋がる結果が得られている。
5	非選択性除草剤による除伐・下刈の省力化試験	森林研究研修センター	C	依頼業務として、薬剤の効果が検証できている。

表4 平成23年度 県分野融合・萌芽研究推進事業課題 事後評価

整理番号	研究課題名	試験研究機関	外部評価結果	評価委員会指導・助言
1	山形県で分離されたMycoplasma pneumoniaeの薬剤耐性に関する遺伝子変異の解析	衛生研究所	C	流行したマイコプラズマ肺炎菌遺伝子変異と耐性菌の同定がされ、菌株同定の有用な方法が得られた。今後は流行と菌株の関係を明らかにするために継続的な調査が必要である。
2	高感度赤外線吸収素子への応用を目指した多孔質シリコンの形成	工業技術センター	C	赤外線吸収特性を有する多孔質シリコンの開発ができています。今後MEMSデバイスとしての展開に期待する。
3	シロギスの年齢相質に関する研究(成魚の捕獲量調整のための年齢組成の把握に向けて)	水産試験場	D	捕獲量を調整するための基礎データとして使えるよう、サンプル数など研究計画を再考すべきである。
4	やまがたバンブー里山活用プロジェクト(竹林被害の実態把握と管理技術の開発)	森林研究研修センター	C	竹林の分布状況は把握でき、これを基に被害の分析や管理技術確立に向けた継続研究に期待する。
5	山形漆 優良品種のクローン増殖技術の開発	森林研究研修センター	C	地域資源の確保・開発の観点から研究を継続し、分根によるクローン増殖が成果に繋がることを期待する。
6	かき幼果の加工原料生産に向けた果実肥大促進技術の検討	庄内総合支庁産地研究室	C	加工原料として果実の肥大効果のある薬剤を特定でき、目標を達成できている。今後の具体的な加工品開発に期待する。

表5 平成24年度 県試験研究機関試験研究課題(一般研究課題) 事前評価

整理番号	研究課題名	試験研究機関	外部評価結果	評価委員会指導・助言
1	次世代エネルギー活用による施設花きの効率的生産技術の開発	農業総合研究センター園芸試験場	C	これまでの取組みの中で一定の成果をあげてきているので、規模を大きくした実証を行ってもよい時期であると考えている。しかし、多額の予算を掛けて行う事業としては独自の工夫をきちんと示すなど、費用対効果が期待できる明確な目標の設定をして年度ごとの検証を確実にやっていく必要がある。

表6 平成24年度 県試験研究機関試験研究課題(公募型研究課題) 事前評価

整理番号	研究課題名	試験研究機関	外部評価結果	評価委員会指導・助言
1	地区・経営体における斑点米カメムシの被害予測モデルの開発	農業総合研究センター	可	カメムシの分布様式の基礎データをしっかり取って、予測モデルの再構築を行ってほしい。
2	オウトウ等農産物に含まれる機能性成分(オスモチン等)含有量の評価と栽培対応技術の検討	農業総合研究センター 園芸試験場	可	おとうに含まれるオスモチンの定量評価を見極め、栽培条件と機能成分との関連に注目しつつ研究を進めてほしい。
3	トマト溶液栽培による高収益生産技術の開発	農業総合研究センター 園芸試験場	可	低コスト生産として有効な手段だと思うが、初期投資を含めたトータルコストの考慮も必要と考える。
4	ぶどう「シャインマスカット」周年安定供給に向けた越年出荷技術の開発および輸出実証	農業総合研究センター 園芸試験場	可	簡便な管理でぶどうの鮮度を保つ保存技術を確立し、新しい高級ブランドを目指して消費拡大を図ってほしい。
5	大豆等畑作物における有用微生物の解析および効果検証	農業総合研究センター 園芸試験場	可	収量回復の有用菌を特定し、他の要因も考慮しながら効果の検証を行ってほしい。
6	広葉樹資源の有効利用を目指したナラ枯れの低コスト防除技術の開発	森林研究研修センター	可	これまで蓄積された研究成果を基に検証と普及を進め、広葉樹の枯損防止の全国的な展開を期待する。

※評価した12課題のうち採択された6課題だけを掲載

表7 平成24年度 県試験研究機関業務課題 事前評価

整理番号	研究課題名	試験研究機関	外部評価結果	評価委員会指導・助言
1	小児由来Mycoplasma pneumoniaeの増殖能解析	衛生研究所	可	本県で分離されたマクロライド耐性菌について研究を続け、成果を県外にも早期に発信できることを期待する。

表8 平成24年度 県若手チャレンジ推進事業 採択結果

整理番号	研究課題名	試験研究機関	外部評価結果	評価委員会指導・助言
1	廃棄物焼却灰からの放射性セシウム溶出特性に関する研究	環境科学研究センター	A	焼却灰中のセシウムの溶出の挙動に関する基礎データとなるよう、他の研究成果も取り入れて早期に結果が出ることを望む。
2	リアルタイムPCRによる水道水中のクリプトスポリジウム、ジアルジア遺伝子検出系の確立	衛生研究所	A	水の汚染について遺伝子による簡便検査の有用な手法になりうる課題と思わる。試料中の全個体から漏れなくDNAを抽出するよう基礎的検討を重ね、測定精度の向上に期待する。
3	紅花染めモヘア系の開発と製品化への検討	工業技術センター	B	繊維の風合いを損なわない条件を探し、極細のモヘア系の紅花染めとしてのブランド化を目指してほしい。
4	工学分野との融合による環境に優しい農薬代替技術の開発	農業総合研究センター	B	環境への影響が少ない殺菌方法と考える。コストや発生量の制御などメリット以外の検討も必要である。
5	食用ぎくにおける交雑育種技術の確立と、メタボローム解析を用いた育種母本の選抜	園芸試験場	C	メタボローム解析のマーカーをしっかり検討したうえで、その結果を有効利用し、新品種の開発につなげてほしい。

※評価した8課題のうち採択された5課題だけを掲載